Interview

駐日ラテンアメリカ大使インタビュー

パナマ共和国

カルロス・ペレ駐日パナマ大使

小さくても大きな魅力を持つパナマを知ってほしい

パナマのペレ駐日大使は、ラテンアメリカ協会のインタビューに応じ、日本の印象、パナマの魅力や外交政策、日本・パナマ関係の現状と展望などについて語った。同大使は、衣料、飲食、通信分野で起業家としてビジネス経験を積んだ後、2020年3月から駐日特命全権大使。インタビューの一問一答は次の通り。

―大使は新型コロナウイルスが猛威を振う中で駐日大使として着任されましたが、日本についてどのような印象をお持ちですか。日本での生活で気に入られたことはありますか。

私が日本に到着したのは2019年10月で、新型コロナウイルスで世界が停止する数か月前のことでした。2020年3月、日本は事実上国を閉じ、世界の他の国々と同様、それぞれの国に住む人々の健康と福祉を第一に考えることになりました。難しい時期でした。私の家族はまだ日本にいませんでした。しかし、どんな困難に直面しても、明るい面を見なければなりません。当時は東京をよく歩き回り、日本の文化をより深く知ることができました。困難な時期ではありましたが、日本に来たことをまったく後悔していません。今では、日本での生活が好きかと聞かれたら、「大好きです」と答えます。私はすべての人に一生に一度は日本に来ることを勧めます。そして、日本の人々、文化、食べ物がどんなものなのかを理解してほしいと思います。

―貴国は地政学的な好条件を活かし、パナマ運河による海上輸送、航空、金融、物流等のハブ（拠点）として発展していますが、最近の状況や今後の課題について教えてください。

パナマはその地理的位置に恵まれています。1914年にパナマ運河が開通して以来、世界貿易は一変し、現在では世界貿易の8%がパナマを経由しています。金融と物流の分野では、利便性の高い米ドルを流通通貨として使用しています。航空分野では、パナマはそのユニークな地理的位置により、南北アメリカの82都市と結ばれています。この地域の空港の中で、このような接続性を持つ空港は他にありません。パナマは、グリーンエネルギーと教育の中心地として、また社会変革を推進する革新的なコミュニティである「知識の都市（la Ciudad del Saber）」として知られています。このようにパナマは、世界中の関心を持つ個人、機関、組織に対し広く門戸を開いています。最近の経済状況については、フォーブス中米レポートによると、パナマは2022年に6%の成長を遂げました。これはパナマをこの地域のリーダーとして位置づけるものです。

―2019年7月に発足したコルティソ政権は、コロナ禍により落ち込んだ経済の回復、財政赤字の抑制、教育改革の推進などに取り組んでいると聞きますが、その成果と今後の見通しについて教えてください。

コロナ禍が始まったとき、コルティソ大統領の政

権は、パナマ国民の命を救うことを第一に考え、経済にブレーキをかけました。実際、大統領に提出された、コロナ禍に直面して思い切った対策を講じなければどうなっていたかについての報告書によれば、対策を講じなければ10万人近いパナマ人が亡くなっていた可能性がありました。その決断がどれほど難しいものであったか、私には説明できません。それ以来、パナマは経済を回復させ、現在では経済成長においてこの地域のリーダーとなっています。パナマはこれからも成長し続けるでしょう。

―外交分野においてコルティソ政権が重視している政策は何ですか。特に、日本、中国、東南アジア諸国連合（ASEAN）諸国を含むアジア太平洋地域との関係について教えてください。

コルティソ大統領は、パナマはどちらの側にもつかない国である、すなわち、民主主義と人権を尊重し、パナマと共に成長しようとする国であれば、パナマは全ての国の友でありたい、と明言しました。日本は、パナマがアジアで最初に外交関係を樹立した国です（1904年）。来年（2024年）は、パナマと日本の外交関係樹立120周年に当たります。中国については、パナマは最近国交を樹立しましたが、それは互恵に基づく関係です。パナマには約30万人の中国人の子孫がおり、中国系の人口が非常に多いことを忘れることはできません。ASEAN諸国については、今年9月4日、パナマはASEAN諸国との関係をさらに強化するため、東南アジア友好協力条約（TAC）への加盟文書に調印しました。

―日本とパナマは明年外交関係樹立120周年を迎えますが、大使は両国関係の現状をどう見ておられますか。今後どのような分野で関係の強化を期待しておられますか。

先に述べたように、パナマと日本の外交関係樹立120周年を目前に控えています。日本との関係は常に健全なものでした。今日、パナマと日本の外交関係は透明性が高く、成長の時にあると感じています。60％の日本船がパナマの船籍を持ち、日本はパナマ運河の第二の利用国でもあります。日本の国際協力機構（JICA）から約30億ドルの融資を受け、約70万人の生活を変えるパナマ地下鉄3号線プロジェクトが実現しつつあります。このプロジェクトは現在、ほぼ45％が完成しています。日本との関係の将来を考えると、私は日本がパナマにグリーンエネルギー・センターを設立することを願っています。また、私の夢のひとつは、パナマに日本の教育システムを導入した学校を作り、私が敬愛してやまない日本文化を子供たちに学ばせることです。私は常々、現職（駐日パナマ大使）の後は、全世界に向けての日本大使になると言っています。私は、誰もが日本の文化を学ばなければならないと信じていますし、パナマ人がもっと日本を知るようになることを願っています。

―大使はビジネスの分野で豊富な経験をお持ちですが、経済関係の強化においてどのような分野が有望ですか。そのために、何が必要だとお考えですか。

最も永続的なつながりは、パナマと日本との間の海上交通分野のつながりであることは言うまでもありません。パナマに進出している日本企業の未来は明るいと思います。パナマシティと東京を結ぶ直行便を就航させる時が来たと考えます。日本企業においても、パナマをラテンアメリカへのゲートウェイとして検討してはいかがでしょうか。パナマが日本企業の地域的なハブとなることで、パナマの未来はより明るいものになる、と私は想像しています。

―貴国には、音楽、コーヒー、エコツーリズムなど他にも多くの魅力があるようですが、日本人にもっと知ってほしいことは何ですか。

ゲイシャ・コーヒーを世界に知らしめたのは日本人です。当時、コーヒーに通常の600％以上の値段を支払っていた日本人の目利きのおかげで、ゲイシャ・コーヒーはよく知られるようになりました。今日、パナマの名はゲイシャ・コーヒーと運河で知られています。その他にも、カカオやラム酒、クラフトビールなど、パナマには日本人に好まれそうな質の高い商品があります。投資については、パナマ政府だけでなく、パナマ企業も日本への投資に関心を持っていることを改めてお伝えしたいと思います。

観光に関しては、2024年にパナマでアドベンチャー・トラベル・ワールド・サミットが開催され、世界中の観光関係者、企業、団体が一堂に会し、意見交換やアドベンチャー・プランの最終決定を行います。パナマは、82キロ以内に2つの大洋があるというユニークな位置にあります。この地理的優位性により、さまざまな冒険プランを作ることができます。また、パナマでは2000種類近くの鳥類を見ることができますし、ゲイシャ・コーヒー・ツアーも催

されています。パナマには多くの魅力がありますので、直行便が就航すれば観光業は大きく変わるでしょう。

―『ラテンアメリカ時報』の読者に対しメッセージがあれば、お願いします。

パナマは小さな国です。東京都新宿区の人口はパナマ全土の人口よりも多く、パナマの国土は北海道とほぼ同じ大きさです。しかし、私たちはとても大きな心を持っており、いつも両手を広げて訪問者を歓迎しています。ぜひ私たちの国を訪れてください。私が日本を好きになったように、あなたもパナマを好きになること請け合いです。

（注）本インタビューのスペイン語全文は、ラテンアメリカ協会ホームページ英語サイト Interviews 欄に掲載しています。

（ラテンアメリカ協会副会長　佐藤　悟）

ラテンアメリカ参考図書案内

『先住民から見た世界史 ―コロンブスの「新大陸発見」』

山本 紀夫　KADOKAWA（角川ソフィア文庫）
2023 年 5 月　320 頁　1,160 円＋税　ISBN978-4-04-400757-7

コロンブスが欧州に持ち帰った中南米原産の農産物のうち、トウモロコシはその後アフリカへ伝えられ特に熱帯アフリカでは食事の根幹になった。ジャガイモは欧州で後に重要な食糧となったが、その単一種に依存し過ぎたアイルランドでは疫病の蔓延で大飢饉が発生し大量の難民が北米等に移住した。トウガラシは瞬く間にアジアの東端まで伝わる香辛料となった。一方、持ち込まれた馬、牛をはじめとする家畜は北米先住民の生活を破壊したが、最も負の影響が大きかったのは天然痘やはしか、インフルエンザ等で、征服の過程での虐殺・植民地化による強制労働の死者を遙かに上回る凄惨な人口減をもたらした。世界史で「コロンブスの交換」と言われる語感にある平等性とは大きく異なる不平等な、コロンブスの功罪というよりは「罪」の方が大きかったことを明らかにしている。

著者は農学を修めペルーでジャガイモ研究に打ち込み、それを栽培する先住民に関心をもったことから民族学へ転向し、アンデス、ヒマラヤ等の高地での比較研究も行っている国立民族学博物館名誉教授。本書は著者の『コロンブスの不平等交換 ―作物・奴隷・疫病の世界史』（角川選書、2017 年刊 https://latin-america.jp/archives/23042）を再構成・加筆し改題のうえ文庫化したもの。「コロンブスの交換」を先住民の側から見た農学と人類学の現地調査、研究の結果も取り込んだもう一つの世界史として興味深い。　〔桜井 敏浩〕

『奴隷制の歴史』

ブレンダ・E・スティーヴンソン　所 康弘訳　筑摩書房（ちくま学芸文庫）
2023 年 8 月　368 頁　1,400 円＋税　ISBN978-4-480-51203-1

本書では奴隷が労働力や「商品」としてどのように組み込まれ、どう酷使され、搾取されてきたか、農作業、家事労働、さらに性奴隷とその結果として生まれた子どもという奴隷再生産に至るまでの奴隷制の様々な論点を、米国の経済発展や資本蓄積のプロセスを俯瞰する中でその歴史全体に関わっていることを明らかにしている。北米での植民地世界におけるアフリカ人奴隷の導入と南北戦争以前の米国における奴隷制と反奴隷制が論考の中心になっているが、古代世界ならびに、中東・アジア・アフリカ、欧州における奴隷制の歴史、新大陸での「接触」後のアフリカと大西洋を結ぶ奴隷貿易の始まりについても解説しており、中南米でのアフリカ人奴隷の導入からその末裔がどうなっているかを理解する上でも参考になる。

著者は米国南部史、アフリカ系米国人史、特に人種、奴隷制度、人種間の対立に関する研究者として知られる英国オックスフォード大学教授。訳者は貿易論、ラテンアメリカ地域研究を専門とする明治大学教授。　〔桜井 敏浩〕